

氏名	成田麗奈
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第190号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉1920年代フランスの音楽批評における「六人組」評価
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 片山千佳子
（副査）	〃 〃（ 〃 ） 大角欣矢
（ 〃 ）	〃 〃（ 〃 ） 福中冬子
（ 〃 ）	〃 〃（ 〃 ） 小鍛冶邦隆
（ 〃 ）	群馬県立女子大学 名誉教授 戸澤義夫

（論文内容の要旨）

本論文は、1920年代フランスの音楽批評において、「六人組」がどのように評価されていたのかを実証的に研究し、彼らがフランス音楽史においてどのように位置づけられたのかを明らかにすることを目的とする。

「フランス六人組」はジョルジュ・オーリック、ルイ・デュレ、アルテュール・オネゲル、ダリウス・ミヨー、フランシス・プーランク、ジェルメーヌ・タイユフェールの六人からなる作曲家グループである。この名称は1920年1月16日付の『コメディア *Comœdia*』においてアンリ・コレが命名したもので、従来は恣意的に選ばれた若手作曲家グループとみなされてきた。だが、実際には彼らは1917年の「新青年」以降自発的にグループを形成しており、『六人組のアルバム *Album des Six*』、『ル・コック *Le Coq*』の刊行や、定期的な演奏会など、積極的に共同で音楽活動を行っていた。

コクトーと六人の作曲家は、コレに「六人組」命名を用意周到に依頼しつつも、『ル・コック』での共同宣言等において素知らぬふりをするによって注目を集めようとする、自作自演の演出をしていたことが明らかになった。

また、彼らが作曲家としての名声や評価を獲得するためにさまざまな模索をしており、ミヨーとオネゲルが多調性を中心とする革新性を、プーランクとオーリックは簡潔さや明快さを追求していった。そして彼らが牽引する六人組のイメージが、デュレとタイユフェールを巻き込む形で展開されてゆく。

1920年代の音楽批評から上演情報を網羅的に調査した結果、六人組の作品は、ジャーヌ・パトリやジャン・ヴィエネルをはじめ数多くの演奏家や演奏団体によって継続的に演奏されていることが判明した。そして、バレエ作品やオーケストラ作品において、挑戦的な音楽語法を用いることで批評誌において賛否両論を引き起こし、「成功のσκヤンダル」が具現化されていた。

『ルヴュ・ミュージカル *La Revue musicale*』、『メネストレル *Le Ménestrel*』、『クーリエ・ミュージカル *Le Courrier musical*』において、六人組は注目される存在であり、多調性や革新的な和声による複雑な書法に対して賛否両論が引き起こされていたことが解明された。こうした革新性を肯定的評価として意味づけたのがアンドレ・ターロワ、ポール・ランドルミー、シャルル・ケックラン、ボリス・ド・シュレゼールであり、彼らはそれぞれの立場から六人組を若手作曲家の中心的存在と位置づけ、フランス音楽史における新しい方向性を描き出そうとした。

六人組を肯定的に評価づけるうえで重要な論点となったのが多調性と新古典主義である。当初多調性は和声的革新の象徴とみなされ、フランス音楽の進歩を顕示するものとして評価されており、六人組は

その担い手として評価された。また、1920年代後半には、従来軽蔑的な意味で用いられていた新古典主義が肯定的な意味で捉え直されるようになり、六人組の解体と並行して肯定的に価値づけられていることが明らかになった。また、こうした議論の中で、ポスト・ドビュッシー、対シェーンベルクという評価軸が存在していることも指摘された。こうした音楽史的観点からの批評によって、六人組はフランス音楽の未来を象徴する存在として位置づけられていたのだと言える。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、1920年代の「6人組」について、同時代の音楽雑誌における批評を検討することを通じて、そこからどのような像が現れるかを検証しようと試みた論文である。論文の序論には、「本研究は6人組の〈実体〉を明らかにしようとするアプローチ方法はとらない」とある。たしかに、「そもそも思想的な団結によって結成されたものではない〈6人組〉に、共通の理念を見出したり〈6人組的なもの〉を描き出したりしようとしても、そこには恣意的な〈6人組〉しか浮かび上がらない」のである。つまり申請者の当初の問題意識は、6人組の実体を一次資料から解明するのではなく、6人組という現象を一時的にせよ可能にしたジャーナリスティックな「言説空間」を問題にしようとしたことにあり、その方向性自体は従来の実証主義的な歴史研究を超える可能性を孕んでいた。

しかしながら申請者が雑誌資料から引き出した結果は、残念なことに、単に個々の言説断片の紹介に終わってしまっている。どの審査員からも共通して指摘があったが、変換ミスや伝語の引用文における不用意なミス、「新古典派」や「多調」などの概念の不用意な使用が、論文全体としての説得力を失わせている。さらにフランス語の読解力不足のせいなのか、当時の音楽をめぐる言説という表層の背後にどのような社会的・政治的力学が働いていたかを問う、ダイナミックな側面の分析には踏み込めないままに論述が続く。そのため、論文の記述からは特に新たな歴史的知見が開けてくるわけではない。

それでも、本論文の学術的成果としては、6人組の作品上演についての詳細な情報を整理したこと、およびバレエ・リュスやバレエ・スエドワなどの舞踊団の貢献に光をあてたことなど、当時の資料としての言説を調査しなければはっきりとした形で見えてこなかった事実を提示した点にあるだろう。また、「6人組」なるものが当時の音楽ジャーナリズムをも巻き込んだ表象としてかろうじて成立した現象であることを具体的に示したことについては、一応の評価を与えることができる。